近時医学殊に麻酔学の著しい進歩により高年者に於ける手術も安全に施行されるようになり，手術症例数も漸次増加しつゝある。我々の教室でも高年者の手術数は年を追つて増加しつゝある。昭和 30 年から昭和 35 年 8 月までに行つた手術総数は心臓外科，形成外科，脳外科を除き 3306 例であるが，そのうち 50 才以上の手術総数は 420 例(12.7%) に認められた。我々は 50 才以上の手術症例 50 例とその対照として 49 才以下 15 例を用いて次の様な検査を行つた。即ち循環器系（血圧，レ線像，心電図，傾斜試験，眼底検査），呼吸器系，肝機能，血液，尿尿一般及び血清中の電解質，蛋白質，コレステロール等の検査を行い，これら検査事項と術中血圧及び脈搏の変動，輸血輸液の影響について比較検討を加えた。

その主なる結果についてみると高年者群に於ては，傾斜試験血圧及び脈搏動揺率，術中血圧動揺率の大なる例が多く，又これらの例に眼底動脈硬化度の高度の例が多くみられた。又心肺係数，大動脈弓突出度は高年者により大なる値を示した。その他心電図等についても同様の方法により検討を加えた。

以上の点から高年者群に於ては若年者群に比して変動が多くみられたが，術中経過に於いては特に著変はみられなかつた。従つて，適確な術中麻酔管理，輸血輸液のコントロール下では，何ら懸念すべき偶発事故もなく，安全に手術を行える事を認めた。

27. 高血圧症における聴診間隙について

(放射線)○島津フミヨ
村田みどり

高血圧症にのみ特徴的に聞かれる聴診間隙を血圧測定中における Korotkoff 音の消滅だけでなく，Korotkoff 音の減衰をも含めて解釈，その発生機序を動脈圧曲線および Korotkoff 音の忠実なる記録により解析した。その結果聴診間隙の発現は末梢動脈の硬化による弾性率の増加ならびに末梢血管の血流抵抗増大に起因するものであると考えられるに至り，正常例でこの聴診間隙をみとめない被検者でも物理的に Cutt 部より末梢の血流抵抗を高める時にこの聴診間隙を作製することができた。ここで聴診間隙曲線の深さ，巾は共に末梢血管の弾性率増加ならびに血流抵抗の増大等いずれも末梢の動脈硬化性変化を示すものと考えられるのでこれ等を量的に表現し，心電図所見，胸部レ線所見，眼底所見等による臨床判定結果と比較したところ，両者の間に良好な相関を認めこの聴診間隙を高血圧症の病状推定に有利な検査事項となしうることが判明した。

なお，老人性高血圧症の如く，稀に末梢血管の硬化変性が少く中枢性の動脈硬化が強く認められる場合には臨床判定と聴診間隙所見による判定との合致をみなかつたが，これはエレクトロキモグラフィーによつて中枢側動脈の変性を推察することによりよく病状との対応を期せしめることができた。

28. 高血圧症の臨床的研究（第 2 報）若年性本態性高血圧症の薬物テストについて

(三神内科) 三神美和，小山千代
荒木　仲，阿久津初枝
小林成子，久保か爾子
八木下富子○管野照子
武藤慶子

若年性本態性高血圧症は，その症例の多くは無自覚の場合が多く，偶然，会社若くは学校等における健康管理または集団検診の結果発見されることが多い。しかしその頻度は，Braasch の 21%，Boynton の 20% 以外は諸家の報告は大体 10%以下である。

本症はその病態生理や諸検査の結果を綜合するときは壮年期以後にみられる本態性高血圧症と多少趣きを異にしており興味深い点がある。

われわれは，さきに本態性高血圧症を対象として薬物テストを行い，その成因に関して種々の考察をしたが，その結果本症ではこの反応からこれを A.B.C の 3 群に分類し得た。今回は某大学学生の集団検診を行い，19才から 26 才までの男子 1841 名につき血圧測定および尿検査等を行い，若年性本態性高血圧症と認められるもの 49 名(2.6%)の成績を得た。このうち最高血圧 140～149 mmHg のもの 16 名(32.7%)，150～159 mmHg 21 名(42.9%) 160～169 mmHg 8 名 (16.3%)，170～179 mmHg 4 名(8.1%) である。

これら被検者につきレジチン試験を行つたところ，A) 陽性者は 1 例もなく，これを以下述べる如き 4 群に分つことが出来た。すなわちB) 最高血圧のみ 35 mmHg 以上降下するもの 2 名(4.0%)，C) 最高最低ともに著変なきもの 38 名(77.3%)，D) 最低血圧のみ 25 mmHg 以上降下せるもの 7 名 (14.4%) E) レジチン試験注射後最高血圧が注射前より上昇するもの 2 名 (4.0%) であつた。本症にA群が 1 例もなくまた D.E.群はさきの本態性高血圧症においては 1 例もないという事は，若年性本態性高血圧症の成因を考察するうえに非常に興味深いものと思われる。

29. 高血圧と糖代謝

(中山内科) 多々良和子

演者は高血圧者にどの位糖代謝異常が存在するかを確かめるため，本態性高血圧者 83 例と対照として非高血圧者 50 例について空腹時米飯 300 g 以上を負荷し糖同化能及び糖尿を検するとともに心，腎機能検査をも施行し比較検討した。その成績では高血圧者 83 例中 22 人(26.5%)に明かな糖代謝異常を，23 人(27.7%) に異常の疑を認め，非高血圧者 50 例では 7 人(14%)に明らかな糖代謝異常を，8 例(16%)に異常の疑を認め高血圧者